

横浜港港湾脱炭素化推進計画 (別冊)

4-1. 温室効果ガスの排出量の削減並びに吸収作用の保全及び強化に関する事業



令和8年(2026年)4月改訂

(令和7年(2025年)3月策定)

横浜市(横浜港港湾管理者)

4. 港湾脱炭素化促進事業及びその実施主体

4-1. 温室効果ガスの排出量の削減並びに吸収作用の保全及び強化に関する事業

4-1-1. 臨海部の脱炭素化に向けた取組

横浜市臨海部における港湾脱炭素化促進事業（臨海部の脱炭素化に向けた取組）及びその実施主体は、以下のとおりである。なお、これらは、各主体における現在の検討状況を示したものであり、今後の脱炭素化に資する技術の進展及び社会状況の変化等を踏まえた各主体の検討、企業間連携の進展や新たな主体の参画などを反映して更新していくこととする。

(1)短中期（2030年度）

表25 臨海部の脱炭素化に向けた取組（短中期）

臨海部の取組			
取組内容	実施主体	場所	実施期間
照明設備の省エネ化（LEDほか）	AGC株式会社	AGC横浜テクニカルセンター	2019～2021年
	ENEOS株式会社	横浜製造所	2023年度～
	株式会社扇島パワー	扇島パワーステーション	2013年度～2023年度
			2024年度～2025年度（実績）
			2026年度（予定）
	東京ガス株式会社	鶴見区	2024年度導入
	東芝エネルギーシステムズ株式会社	京浜事業所	2024年度～
	公立大学法人横浜市立大学	全キャンパス	2021～2026年度
	株式会社IHI	横浜事業所	2021～2024年度
	JFEエンジニアリング株式会社	横浜本社	2022年度実施済
三菱重工業株式会社	本牧	～2026年度	
上野グループホールディングス株式会社	本社ビル	2024年度	
空調・熱源設備等の省エネ化（機器更新、エネマネ、DHC改善ほか）	AGC株式会社	AGC横浜テクニカルセンター	～2030年
	株式会社扇島パワー	扇島パワーステーション	2025年度（実績）
	東亜合成株式会社	横浜工場	2020～2025年度に対応 完成後効果発生
	公立大学法人横浜市立大学	福浦キャンパス・附属病院	2021～2026年度 2021～2027年度 2021～2024年度
		鶴見キャンパス	2022～2026年度 2022～2026年度 2023～2026年度
	JFEエンジニアリング株式会社	横浜本社	2023年度から運転開始
	三菱重工業株式会社	本牧	～2027年度
	上野グループホールディングス株式会社	本社ビル	2024年度
第1上野ビル		2025年度	

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
1,200,000kWh	—	
23年度110灯 9.2kW	58	
一式	169	
一式	5	
一式	41	
一式	2	
導入率72%	40	
58.3MWh	27	
導入率95%	800	
一式	350	
一式	40	
(更新前) 電気使用量135,502KWh	34	
共通部門におけるエネルギーマネジメント	3,700	
事務棟GHP更新	35	
1号ターボ冷凍機の更新	確認中	2025年6月設備稼働
ア 受変電設備、高効率トランスへの更新 イ 空調機の老朽化更新 ウ 蒸気配管修繕(リーク)、病院縦配管(南側)修繕	47	市民医療センターや金沢八景キャンパスも同様に取り組むが、対象範囲外なので、CO2削減量は計上しない。
ア PAC室外機のフィン洗浄。 イ 冷却水ポンプのINV化。 ウ 低温室の冷却ユニットの更新	5	
蓄電池の導入(2.5MW/5MWh)	—	
空調・給湯設備の更新・合理化	120	
(更新前) 電気使用量345,212KWh	84	
(更新前) 電気使用量86,989kWh	13	

臨海部の取組			
取組内容	実施主体	場所	実施期間
生産設備の省エネ化	ENEOS株式会社	根岸製油所	随時
			2022年度～
		横浜製造所	2023年度～
			2022年度～ 2024年度～
建物脱炭素化（複数取組）	NTTドコモビジネス株式会社	通信ビル1拠点	2023年～2030年 （一部～2040年）
		オフィス4拠点	2023年～2030年
	株式会社日立製作所	システムプラザ横浜	実施
	横浜市	みなとみらい21地区	2022年度～ 2030年度、実施中
	株式会社三菱UFJ銀行	グローバルラーニングセンター	2024年度
未利用エネルギーの活用	東亜合成株式会社	横浜工場	2021～2024年度に対応、完成後効果発生 2022年～2026年度に対応、完成後効果発生
太陽光発電	株式会社IHI	横浜事業所	2023～2030年度
	上野グループホールディングス株式会社	本社ビル	2025年度～
洋上風力発電	東芝エネルギーシステムズ株式会社	京浜事務所	2028年度～
	株式会社横浜工作所	安善ドック事業所、大黒工場	2027年度～（想定）
脱炭素電力・燃料の使用 （CO2フリー電力、証書、クレジット）	AGC株式会社	AGC横浜テクニカルセンター	2022年～
	東京ガス株式会社	横浜市	2023年度導入
	JFEエンジニアリング株式会社	横浜本社	2021年度より順次導入
	日本郵船株式会社	氷川丸	2020年～
		横浜支店、歴史博物館グループ	2023年～
株式会社三菱UFJ銀行	支店等施設	2022年度	
発電機の更新、水素・アンモニア利用	日清オイリオグループ株式会社	磯子事業場	2025年度～稼働 2027年以降、2030年までに
次世代燃料バンカリング	三菱ガス化学株式会社	横浜港	2025年度

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
既存設備の省エネ化改造	—	
常圧蒸留装置一系列化	349,000	
大型蓄電池導入	—	
不要配管の撤去(0.241 Ton/h)	310	
長期休暇中のスチーム使用削減(GW 10日間 お盆 10日間)	33	
拠点の脱炭素化 (機器の更新による省エネ化、非化石証書の購入等)	1,200	
グループ拠点の脱炭素化 (機器の更新による省エネ化、非化石証書の購入等)	300	
・高効率空調機への更新 ・空調機・加湿器の適正稼働台数の見直し ・非化石証書の購入	2,105	前年度に対し7.7%の削減率
脱炭素先行地域 建物使用電力の脱炭素化 (徹底した省エネ、再エネ導入など)	190,000	環境省地域脱炭素移行・再エネ推進交付金 【共同申請者】横浜市・(一社) 横浜みなとみらい21
脱炭素先行地域 建物使用熱エネルギーの脱炭素化 (オフセット、機器更新等)	45,000	【参画事業者】地区内45施設 (R7年11月現在)
熱の脱炭素化(10,199GJ/年)	(680)	脱炭素先行地域の削減量に含まれているため参考値として記載
熱回収による蒸気使用量削減	561	2023年11月設備稼働
ごみ焼却熱有効利用実証試験	6,349	令和6年度 二酸化炭素排出抑制対策事業費等補助金申請採択
1,000kW	100	
再生エネルギー利用による脱炭素化	測定中	
風車ナセルの製造 年間72基 12.5MW/基	—	(参考値) CO2削減 124.1万t-CO2/年
浮体式洋上風力発電向けアンカー製造 経産省・NEDOが進めるGI基金による大規模実証プロジェクト2か所(秋田県南部沖/風車2基、愛知県田原市・豊橋市沖/風車1基)向けにアンカー約20個製造	—	経産省GX補助金を申請予定
約35,000,000kWh/年	16,000	
一式	13,454	
横浜地区導入100%	5,000	
再生可能エネルギー由来の電力を使用	—	
入居ビルが再生可能エネルギー由来の電力を使用	—	
導入率100%	—	
ガスタービン更新(8,000kW級)	1,200	
ガスタービン年1%水素混焼	1,100	
外航船に、錨地においてShip-to-Shipでメタノールバンカリングを実施。更なる実績積み上げを目指す。	未定	メタノールは、三菱ガス化学新潟工場製のバイオメタノールを含む

臨海部の取組			
取組内容	実施主体	場所	実施期間
各種技術開発・実証	ENEOS株式会社	中央技術研究所	2025年 大型電解槽の開発、技術実証 2030年代 社会実装を目指す
			2022年度からプラント規模でのスケールアップ実証中
			2022年より開始
			実施中
	東京ガス株式会社	鶴見区	2022年度より実証
その他	日本郵船株式会社 株式会社NTTファシリティーズ 株式会社ユーラスエナジーホールディングス 株式会社三菱UFJ銀行	横浜大さん橋	2026年3月から1年間、撤去3か月の予定。
	ENEOS株式会社	横浜市	2014年度～
	株式会社みずほ銀行	横浜港	計画
ガラスリサイクル	AGC株式会社	AGC横浜テクニカルセンター	2026年～
水素キャリアとしてのメタノール及び水素生成器の供給	三菱ガス化学株式会社	横浜港 臨海部	2028年の供給開始を目指す

(参考) 地球温暖化対策計画書制度より算出した、CNP協議会構成員 (15)

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
Direct MCH®:水素キャリアの一種であるMCHの低コスト型製造技術開発	—	
合成燃料製造技術開発	—	
使用済タイヤからタイヤ素原料を製造する ケミカルリサイクル技術開発	—	
水素キャリアの一種であるMCHを原料に電気を得る技術であるMCH-FC技術開発	—	
バイオエタノール製造技術開発	—	
e-methane(合成メタン)製造実証試験	—	クリーンガス証書取得準備中
グリーンデータセンターの実証実験 洋上データセンターの実証実験の構築を2025年10月から実施。	19	
水素ステーションの運営(4カ所)	—	
カーボンニュートラルポート形成に向けた取組を促進するための、新たな金融スキームの創出支援	—	
高圧大流量水素圧縮機の普及	—	
ガラスカレット3,000t/y リサイクル	1,800	最大ケース
コンテナサイズ可搬型の水素生成器、及び、水素原料となるメタノール水溶液の需要家向け供給を開始する。	未定	原料のメタノールは、三菱ガス化学新潟工場製のバイオメタノールを想定
短中期取組合計	639,100	
社)の削減量の合計値(2013→2022)	1,163,695	

(2)中期 (2040年度)

表26 臨海部の脱炭素化に向けた取組 (中期)

臨海部の取組			
取組内容	実施主体	場所	実施期間
照明設備の省エネ化 (LEDほか)	日産自動車株式会社	本牧専用ふ頭	2018年～2032年
熱の脱炭素化 (合成メタン利用ほか)	日清オイリオグループ株式会社	磯子事業場	2030年度～
合成メタンの供給	東京ガス株式会社	横浜市	2030年度以降、 順次導入予定
洋上風力発電	株式会社横浜工作所	安善ドック事業所、 大黒工場	2031年度～2040年度
次世代燃料バンカリング	三菱ガス化学株式会社	横浜港	2030年度以降
水素キャリアとしてのメタノール及び水素生成器の供給	三菱ガス化学株式会社	横浜港 臨海部	短中期計画から継続、 拡大

(3)長期 (2050年度)

表27 臨海部の脱炭素化に向けた取組 (長期)

臨海部の取組			
取組内容	実施主体	場所	実施期間
生産設備の省エネ化	J F E スチール株式会社	扇島	構想
脱炭素電力・燃料の使用 (CO2フリー電力、証書、クレジット)	J F E スチール株式会社	扇島	構想
	日清オイリオグループ株式会社	磯子事業場	構想
発電機の更新、水素・アンモニア利用	日清オイリオグループ株式会社	磯子事業場	構想
	株式会社 I H I	横浜事業所	構想
	横浜市	みなとみらい 2 1 地区	2023年度に2050年に向けたロードマップ作成
LNG火力・石炭火力発電の水素利用	株式会社 J E R A	—	未定
	電源開発株式会社	磯子火力発電所	未定

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
事業所内13300灯の全LED化 2032年完了予定	505	2018年vs13300灯交換後
合成メタン (e-メタン) (供給量の最低1%分)	860	
e-methane (合成メタン) の供給	未定	2030年に都市ガスの1%以上の導入を目指して検討中。事業の効果は今後の具体化と合わせて検討する
浮体式洋上風力発電向けアンカー製造 全国各地の商用の浮体式洋上風力発電向けにアンカーを 量産 (約100~200個/年) 予定	—	経産省GX補助金を申請予定
メタノール基地の整備状況に合わせたバンカリング体制 の拡充と、継続的なバンカリングの実施。	未定	
コンテナサイズ可搬型の水素生成器、及び、メタノール 基地の整備状況を活用した水素原料となるメタノール水 溶液の需要家向け供給を継続、拡大する。	未定	
中期取組合計	1,365	

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
ポンプ小型化等による省エネ	—	
加熱炉等の天然ガスからカーボンニュートラル燃料への 転換	—	
受電分	600	
ガスタービン水素混焼 GT:60%、追い焚き:100%	15,700	
ガスエンジン発電所燃料転換 (都市ガス⇒アンモニア) (4,000kW)	未定	
地域冷暖房における水素等燃料転換 (みなとみらい水素 プロジェクト) (ボイラー設備 規模未定)	45,000	
LNG火力発電所の水素転換等	—	全社的にLNG火力発電所の水素転換を進め、火力発電の排出原単位の低減に努める。 ※各地点における現時点での明確な規模や実施期間に関する回答は控えたい。
J-POWER BLUE MISSION 2050に基づく火力電源のトランジ ション (2基)	—	J-POWER BLUE MISSION2050ロードマップに従い、高効率石炭火力も地点の特性を踏まえて最適な技術を選択し、電力安定供給に貢献しながら低炭素化・脱炭素化を図っていく。 ※2024年5月に磯子火力も含め当社7火力発電所のトランジションの方向性をお示ししたものの、政策、電力需給状況、産業発展の進捗等の前提条件に応じて見直す可能性がある。

臨海部の取組			
取組内容	実施主体	場所	実施期間
電力供給拠点の構築・再エネ電力の供給	横浜市、株式会社海上パワーグリッド、株式会社三菱UFJ銀行など	横浜港	未定
洋上風力発電	株式会社横浜工作所	安善ドック事業所、大黒工場	2040年度～2045年度（想定）
次世代燃料バンカリング	出光興産株式会社	本牧・南本牧ふ頭	構想
	三菱ガス化学株式会社	横浜港	中期計画から継続、拡大
土地利用転換の検討	JFEホールディングス株式会社	扇島	2023年度～
水素キャリアとしてのメタノール及び水素生成器の供給	三菱ガス化学株式会社	横浜港 臨海部	中期計画から継続、拡大

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
電気運搬船による洋上風力からの再エネ導入	未定	横浜市、東電PG、海上PG、戸田建設、MUFJで五者MOU締結 (25年1月)
浮体式洋上風力発電向けアンカー製造 全国各地の商用の浮体式洋上風力発電向けにアンカーを 量産(約100~200個/年) 予定	—	
コンテナ船へのeメタノール燃料給油	未定	eメタノール需要量算定中
メタノール基地の整備状況に合わせたバンカリング体制 の拡充と、継続的なバンカリングの実施。	未定	
カーボンニュートラルを先導するエリアへの土地利用転換	未定	
コンテナサイズ可搬型の水素生成器、及び、メタノール 基地の整備状況を活用した水素原料となるメタノール水 溶液の需要家向け供給を継続、拡大する。	未定	
長期取組合計	61,300	
促進事業取組合計	701,765	

(4)CO₂ 排出量の削減効果

表28 脱炭素化に向けた取組のCO₂排出量の削減効果

項目	合計
① : 基準年におけるCO ₂ 排出量 (2013年)	909.3万t
② : 直近年におけるCO ₂ 排出量 (2022年)	639.4万t
③ : 港湾脱炭素化促進事業によるCO ₂ 排出量の削減量 (2023~2050年)	72.8万t ※
④ : 基準年からのCO ₂ 排出量の削減量 (2050年) (①-②+③)	342.7万t
⑤ : 削減率 (④/①)	37.7%

※ 臨海部における港湾脱炭素化促進事業の合計値 70.1 万 t と埠頭における港湾脱炭素化促進事業の合計値 2.7 万 t を足した値。

4-1-2. 埠頭における脱炭素化に向けた取組

横浜港における港湾脱炭素化促進事業（埠頭における脱炭素化に向けた取組）及びその実施主体は、以下のとおりである。なお、これらは、各主体における現在の検討状況を示したものであり、今後の脱炭素化に資する技術の進展及び社会状況の変化等を踏まえた各主体の検討、企業間連携の進展や新たな主体の参画などを反映して更新していくこととする。

(1)短中期（2030年度）

表29 埠頭における脱炭素化に向けた取組（短中期）

埠頭における取組（ターミナル内）			
取組内容	実施主体	場所	実施期間
照明設備の省エネ化 (LEDほか)	横浜市	ターミナル内 公共施設	～2030年度
	横浜川崎国際港湾株式会社	南本牧ふ頭 MC-4	2021年度
		本牧ふ頭 D-4	2025年度～
		本牧ふ頭 D-5	2025年度～
		本牧ふ頭 D-1	2026年度～
		南本牧ふ頭 MC-1～3	2026年度～
	本牧ふ頭 BC	2027年度～	
横浜港埠頭株式会社	大黒ふ頭 C-1～4, L-1～8	2014年度～2024年	
建物脱炭素化（複数取組）	横浜港埠頭株式会社	大黒ふ頭 C-1～4, L-1～8, 他 本牧ふ頭 A-5	2030年度までに順次対応
太陽光発電	横浜港埠頭株式会社	南本牧ふ頭 MC-1, 2	2014年度～
		南本牧ふ頭 MC-3	2015年度～
	横浜市	大黒ふ頭 T-4	2014年度～
		大黒ふ頭 Y-CC	2016年度～
脱炭素電力・燃料の使用 (CO2フリー電力、証書、クレジット)	横浜川崎国際港湾株式会社	本牧ふ頭 D-1	2022年度～
		本牧ふ頭 D-4	2022年度～
		本牧ふ頭 BC	2022年度～
		大黒ふ頭 T-9	2022年度～
	ターミナル借受者等 ※	南本牧ふ頭 MC-1～4	～2029年度 構想段階
	横浜港埠頭株式会社	大黒ふ頭 C-1	2022年度～
		大黒ふ頭 C-2	2022年度～
		大黒ふ頭 L-1～8	2022年度～
		本牧ふ頭 A-5, 6	2022年度～
		—	2023年度～
日本郵船株式会社	大黒ふ頭 C-3	2020年～	

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
調整中	—	
照明鉄塔6基・ガントリークレーンの照明設備など	—	事業の効果については再エネ電力の導入において計上
照明鉄塔6基・ガントリークレーンの照明設備など	—	
照明鉄塔4基・ガントリークレーンの照明設備など	—	
照明鉄塔6基など	—	
照明鉄塔15基・ガントリークレーンの照明設備など	—	
照明鉄塔13基・ガントリークレーンの照明設備など	—	
導入率100%	—	照明に係わる電力消費量40%~50%削減
ZEB Ready取得に断熱性能向上,空調・給湯等設備の省エネ性能向上,LED照明設備の更なる省エネ化と適正稼働基数の見直しなど	69	
520kW	249	FIT
310kw	184	FIT
300kW	160	FIT
24.5kW	13	
2,145MWh/年	948	
5,645MWh/年	2,495	
9,459MWh/年	4,181	
675MWh/年	299	
27,000kWh/年	10,176	
252MWh/年	110	
198MWh/年	80	
1,389MWh/年	580	
142MWh/年	50	
J-クレジットの活用(ガソリン)(導入率100%)	16	
再生可能エネルギー由来の電力を使用	—	

埠頭における取組（ターミナル内）			
取組内容	実施主体	場所	実施期間
脱炭素荷役機械の導入	横浜川崎国際港湾株式会社	本牧ふ頭 D-1	2021年度～2024年度
		本牧ふ頭 D-4	2024年～2027年度
		南本牧ふ頭 MC-4	2026年以降
		本牧ふ頭 BC	2026年以降
		南本牧ふ頭 MC-1,2	2020年度～2024年度
		本牧ふ頭 BC	2021年度～2023年度
		本牧ふ頭 BC	2025年度～2026年度
		本牧ふ頭 D-5	2028年以降
		本牧ふ頭 C5～9	2026年度～2028年度
脱炭素荷役機械の導入	鈴江コーポレーション(株)、 山九(株)、(株)住友倉庫、 東京国際埠頭(株)、三菱倉庫(株)、 横浜港メガターミナル(株)	本牧ふ頭BC	2015年度～2023年度
	日本通運(株) (株)上組	本牧ふ頭 D-1	～2021年度
			2025年度～2026年度
	CMACGMJAPAN(株)	本牧ふ頭 D-4	2013年度
	APMターミナルズジャパン(株)	南本牧ふ頭 MC-1～4	2015年度～2023年度
			2025年度～2026年度 構想段階
	ターミナル借受者等 ※	南本牧ふ頭 MC-1～4	2027年度～2029年度 構想段階
2027年度～2029年度 構想段階			
2027年度～2029年度 構想段階			
株式会社三井E&S	横浜港	2023年度～2024年度	

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
省エネガントリークレーンの導入(3基)	—	事業の効果については再エネ電力の導入において計上
省エネガントリークレーンの導入(2基)	—	
省エネガントリークレーンの導入(1基)	—	
省エネガントリークレーンの導入(3基)	—	
省エネガントリークレーンの改良(5基)	—	
省エネガントリークレーンの改良(2基)	—	
省エネガントリークレーンの改良(1基)	—	
省エネガントリークレーンの改良(3基)	—	
省エネガントリークレーンの導入(2基)	—	
低炭素型RTG 導入率50%	501	
低炭素型RTG 導入率87.5%	374	
低炭素型RTG 導入率100%	53	
低炭素型RTG 導入率100%	701	
低炭素型RTG 導入率93%	2,134	
低炭素型RTG 導入率100%	305	
RTG 導入率100%	4,551	
リーチスタッカー 導入率100%	2	
トップリフター 導入率100%	1,232	
フォークリフト 導入率100%	107	
構内トラック 導入率100%	3,013	
水素を燃料とする荷役機械の現地実証業務(弊社製ニアゼロエミッション型RTG1台を燃料電池駆動化)	—	CO2排出量をゼロとする
ターミナル内短中期合計	32,583	

埠頭における取組（出入船舶・車両）

取組内容	実施主体	場所	実施期間
次世代燃料バンカリング	横浜市	横浜港	—
船舶の脱炭素化	日本郵船株式会社	東京湾	2024年度～
		横浜港など	2025年7月就航
	株式会社ダイトコーポレーション	横浜港など	2027年度～
	東亜建設工業株式会社、 三和エナジー株式会社	横浜港など	2026年度～
	横浜市	横浜港	2025年度～
			2024年度～
2023年度～			
陸上電力供給設備の導入	横浜市	本牧ふ頭 A-4	2024年度～
		大さん橋	計画中
	横浜川崎国際港湾株式会社等 ※	本牧ふ頭 D-4,5 南本牧ふ頭 MC-3,4	計画中 構想段階 計画中 構想段階
ゲート予約システムの導入	国土交通省関東地方整備局	南本牧ふ頭	2021年度～
		本牧ふ頭	2025年度以降
環境配慮船へのインセンティブ	横浜市	横浜港	2017年度～
			2020年度～
			2025年度～

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
企業と連携して取組を行う	未定	燃料種の増加を想定して、全期間に記載
アンモニア燃料タグボート アンモニア焚きタグボート1隻を2025年に実運航。	重油使用時比最大95%削減	
飛鳥IIIのLNG燃料DualFuel化/陸上電力対応 本船を重油焚き、LNG焚きのDualFuel化としている。陸電取得の設備も搭載。	—	
バッテリー電気推進タグボート	—	国土交通省及び経済産業省による内航船革新的運航効率化・非化石エネルギー転換推進事業
バイオ燃料の海上出荷設備	—	
港務艇へのバイオ燃料対応型エンジンの導入	—	
Blue Visby Consortiumへの参画	—	
Maritime Emissions Portal (ライトシップ社) の活用	—	
低圧陸上電力供給施設	—	5 国際戦略港湾改修事業費補助(横浜港改修(国際戦略)事業)
高圧陸上電力供給施設(大型クルーズ船向け)	—	令和7年度新しい地方経済・生活環境創生交付金(大さん橋国際客船ターミナルを拠点とした臨海部の賑わい促進事業)
高圧陸上電力供給施設(コンテナ船向け)	—	
高圧陸上電力供給施設(コンテナ船向け)	—	
一式	—	
一式	—	
・ESI (Environmental Ship Index) 制度 ・グリーンアワード財団による制度	—	
LNG燃料船及びLNGバンカリング船	—	燃料種の増加により、インセンティブの種類も増加することを想定し、全期間に記載
メタノール燃料船	—	
バイオ燃料使用船	—	
出入車両船舶中短期合計	5	

(2)中期 (2040年度)

表30 埠頭における脱炭素化に向けた取組 (中期)

埠頭における取組 (ターミナル内)				
取組内容	実施主体	場所	実施期間	
脱炭素荷役機械の導入	横浜川崎国際港湾株式会社	南本牧ふ頭 MC-1,2	～2040年度 構想段階	
		本牧ふ頭 BC	～2040年度 構想段階	
		新本牧ふ頭	～2040年度 構想段階	
		南本牧ふ頭 MC-3	～2040年度 構想段階	
		南本牧ふ頭 MC-4	～2040年度 構想段階	
		本牧ふ頭 BC	～2040年度 構想段階	
		本牧ふ頭 D-1	～2040年度 構想段階	
	ターミナル借受者等 ※	本牧ふ頭 D-5	～2040年度 構想段階	
			～2040年度 構想段階	
		本牧ふ頭 BC	～2040年度 構想段階	

埠頭における取組 (出入船舶・車両)				
取組内容	実施主体	場所	実施期間	
次世代燃料バンカリング	横浜市	横浜港	—	
船舶の脱炭素化	横浜市	横浜港	2024年度～	
環境配慮船へのインセンティブ	横浜市	横浜港	2017年度～	
			2020年度～	
			2025年度～	

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
省エネガントリークレーンの導入(5基)	—	事業の効果については再エネ電力の導入において計上
省エネガントリークレーンの導入(6基)	—	
省エネガントリークレーンの導入(8基)	—	
省エネガントリークレーンの改良(4基)	—	
省エネガントリークレーンの改良(1基)	—	
省エネガントリークレーンの改良(2基)	—	
省エネガントリークレーンの改良(3基)	—	
RTG 導入率100%	925	
トップリフター 導入率100%	227	
フォークリフト 導入率100%	14	
構内トラック 導入率100%	549	
RTG 導入率50%	1,077	
トップリフター 導入率13.3%	113	
構内トラック 導入率22.9%	284	
ターミナル内中期合計	3,189	

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
企業と連携して取組を行う	未定	燃料種の増加を想定して、全期間に記載
Blue Visby Consortiumの普及・促進	—	
・E S I (Environmental Ship Index) 制度 ・グリーンアワード財団による制度	—	燃料種の増加により、インセンティブの種類も増加することを想定し、全期間に記載
LNG燃料船及びLNGバンカリング船	—	
メタノール燃料船	—	
バイオ燃料使用船	—	

(3)長期（2050年度）

表31 埠頭における脱炭素化に向けた取組（長期）

埠頭における取組（ターミナル内）				
取組内容	実施主体	場所	実施期間	
脱炭素荷役機械の導入	ターミナル借受者等 ※	本牧ふ頭 BC	～2050年度	構想段階
			～2050年度	構想段階
			～2050年度	構想段階
			～2050年度	構想段階
		本牧ふ頭 D-1	～2050年度	構想段階
			～2050年度	構想段階
			～2050年度	構想段階
			～2050年度	構想段階

埠頭における取組（出入船舶・車両）				
取組内容	実施主体	場所	実施期間	
次世代燃料バンカリング	横浜市	横浜港	—	
船舶の脱炭素化	日産自動車株式会社	全社	—	
	横浜市	横浜港	2024年度～	
環境配慮船へのインセンティブ	横浜市	横浜港	2017年度～	
			2020年度～	
			2025年度～	

事業の効果(CO2削減量t/年)	2013～2050	2013～2022	2023以降
ターミナル内促進事業取組合計	40,383	13,059	27,324
内コンテナターミナルのみ	38,360	11,633	26,727
出入車両船舶促進事業取組合計	5	0	5

※ 実施主体に「等」と追記した取組内容については、6-1. 港湾における脱炭素化の促進に資する将来の構想に記載すべきと港湾脱炭素化推進計画作成マニュアル（2023年3月国土交通省港湾局産業港湾課）に定められておりますが、本計画では港湾脱炭素化促進事業の一覧性を重視して、4-1-2. 埠頭における脱炭素化に向けた取組に記載しております。なお、これらの取組内容が、港湾法第50条の2第5項に定める港湾脱炭素化促進事業に現時点では該当していないことは認識しています。

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
RTG 導入率100%	1,077	
トップリフター 導入率100%	735	
リーチスタッカー 導入率100%	122	
構内トラック 導入率100%	959	
RTG 導入率100%	990	
トップリフター 導入率100%	199	
ストラドルキャリア 導入率100%	33	
構内トラック 導入率100%	279	
フォークリフト 導入率100%	3	
リーチスタッカー 導入率100%	1	
ターミナル内長期合計	4,398	

規模・取組内訳	事業の効果 (CO2削減量t/年)	備考
企業と連携して取組を行う	—	燃料種の増加を想定して、全期間に記載
欧州向けコンテナBio Fuel船の採用	—	
Blue Visby Consortiumの普及促進	—	
・ E S I (Environmental Ship Index) 制度 ・ グリーンアワード財団による制度	—	
LNG燃料船及びLNGバンカリング船	—	燃料種の増加により、インセンティブの種類も増加することを想定し、全期間に記載
メタノール燃料船	—	
バイオ燃料使用船	—	

(4)CO₂ 排出量の削減効果

表32 埠頭における脱炭素化に向けた取組のCO₂排出量の削減効果

項目	ターミナル内 ^{※1}	出入り船舶・車両 ^{※2}	合計
①：基準年におけるCO ₂ 排出量 (2013年)	3.7万t	33.7万t	37.4万t
②：直近年におけるCO ₂ 排出量 (2022年)	2.6万t	32.6万t	35.2万t
③：港湾脱炭素化促進事業によるCO ₂ 排出量の削減量 (2023年～2050年)	2.6万t	0万t	2.6万t
④：基準年からのCO ₂ 排出量の削減量 (2050年) (①-②+③)	3.7万t	1.1万t	4.8万t
⑤：削減率 (④/①)	100%	3.3%	12.8%

※1 コンテナターミナルの数値のみを計上している。

※2 出入り船舶は、停泊中船舶（錨地含む）からのCO₂排出量を計上している。出入車両は、電動化やモーダルシフトなどの対策が現時点では定性的であるためCO₂排出量は計上していない。

今後、民間事業者等による脱炭素化の取組の具体化に応じ、本計画を見直し、港湾脱炭素化促進事業へ追加していくことによって、事業を促進し、目標達成を目指すものとする。

4-1-3. 豊かな海づくりに向けた取組

横浜港における港湾脱炭素化促進事業（豊かな海づくりに向けた取組）及びその実施主体を下表のとおり定める。

(1) 短中期（2030年度）

表33 豊かな海づくりに向けた取組（短中期）

名称 (事業名)	位置	規模	実施主体	実施期間	事業の効果 (CO ₂ 吸収量)	備考
ブルーインフラの 保全・再生・創出	港湾区域 等	護岸、消波 ブロック、 浅場など	横浜市等	～2030年度	約150t-CO ₂ /年	

(2) 中期（2040年度）

表34 豊かな海づくりに向けた取組（中期）

名称 (事業名)	位置	規模	実施主体	実施期間	事業の効果 (CO ₂ 吸収量)	備考
ブルーインフラの 保全・再生・創出	港湾区域 等	護岸、消波 ブロック、 浅場など	横浜市等	～2040年度	約200t-CO ₂ /年	

(3) 長期（2050年度）

表35 豊かな海づくりに向けた取組（長期）

名称 (事業名)	位置	規模	実施主体	実施期間	事業の効果 (CO ₂ 吸収量)	備考
ブルーインフラの 保全・再生・創出	港湾区域 等	護岸、消波 ブロック、 浅場など	横浜市等	～2050年度	約250t-CO ₂ /年	

(4) CO₂ 吸収効果

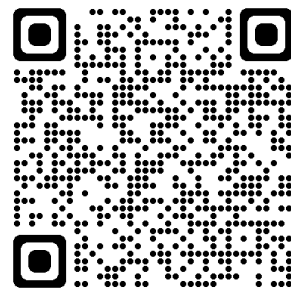
表36 豊かな海づくりに向けた取組によるCO₂吸収量の増加効果

	① : CO ₂ 吸収量 (2024年度)	② : CO ₂ 吸収量の累計量 (2050年度までの累計量)	③ : 増加率 (②/①)
合計	約100t/年	約250t/年	2.5倍

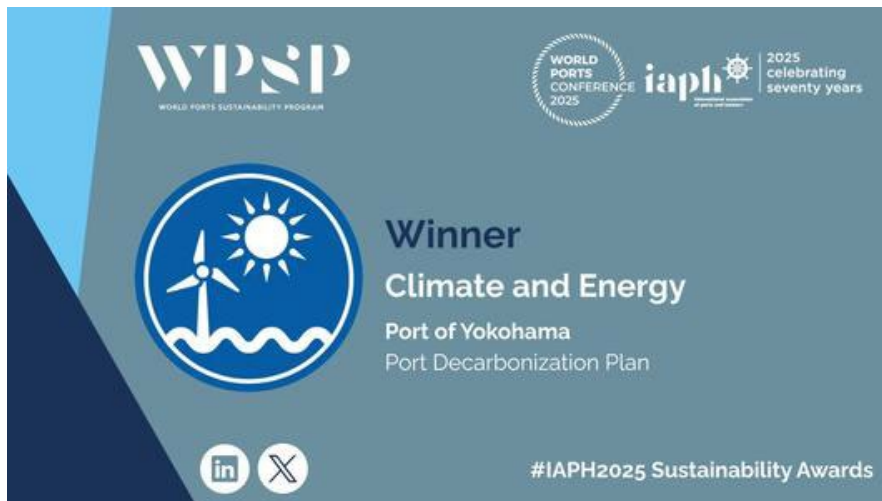
横浜港におけるカーボンニュートラルポートの取り組み
Carbon-Neutral Port Initiatives of Port of Yokohama



日本語



English



【お問い合わせ先】
横浜市港湾局政策調整課
電話:045-671-7165
Mail:kw-seisaku@city.yokohama.lg.jp